

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 27 年 6 月 19 日

所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	石塚真太郎

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
日本モンキーセンター
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
動物園・博物館実習
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 27 年 6 月 15 日 ~ 平成 27 年 6 月 17 日 ( 3 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
JMC キュレーター 新宅氏、高野氏、綿貫氏、赤見氏、早川氏
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>今回の動物園・博物館実習は、動物園や博物館の仕事を体験し、その役割を理解することを目的とし、日本モンキーセンター(JMC)で以下の日程で行われた。</p> <p>2015/6/ 15 集合、園内の案内 2015/6/16 飼育実習、解剖見学、エンリッチメントの討論 2015/6/17 縫合および避妊の見学、骨格標本実習、臓器保存実習</p> <p>私は PWS プログラムの出口として、動物園のキュレーターを希望している。これまで学部時代は京都市動物園に行く機会が多く、動物園動物の福祉や繁殖、教育などの問題についての話を聞く機会は多かった。その上で今回の実習は、とりわけ怪我や病気の動物の取り扱いや、死んだ動物の保存法などこれまでの私にとってなじみが薄く、かつキュレーターになる上で理解しておくべきことを学べるのではないかと考え、期待して参加した。</p> <p>一日目は園内の案内が主だった。ここで印象に残ったのはマカク属の展示についてだった。JMC にはニホンザルを含む 8 種のマカク属の種が飼育されている。この中で 7 種がアジア館において、横並びに展示されている。一方で残りの一種のカニクイザルは、来園者から見えないバックヤードで飼育されている。この理由をキュレーターの方に尋ねると展示スペースの問題のためだとのことであったが、多少の配置転換が必要だとしても、カニクイザルはこれらのマカクと横並びに配置した方が良いのではないかと思った。マカク属は多様な環境に適応し、多くの種が含まれている。一方で、これだけ多様なマカクを飼育している動物園は、国内では JMC の他にない。だからこれらのマカク多様性は、JMC で積極的に教育していくべきことだと思う。そのため多くのマカクを比較できるように、横並びに展示することは重要だろう。アジア館の狭いケージにカニクイザル全頭展示するのは困難だとしても、群れになじめない個体などについては、他のマカクと横並びで展示するのが良いと思う。</p> <p>二日目はまず飼育実習を行った。私は KIDSZOO およびリスザルの担当であった。ここではふれあい動物を野外に出すことや飼育ケージの掃除、給餌の準備などを行った。これまで動物園の飼育員の仕事は直接動物と触れ合う時間が少ないと聞いていたが、餌の準備だけで数時間を要し、改めてその通りだと感じた。動物への愛情と忍耐がないと務まらないと思う。また、飼育担当した種についてのエンリッチメントを考えた。私はリスザルについての採食エンリッチメントを提案した。リスザルはアマゾンに生息し、一日のほとんどの時間を樹上で過ごす。私が観察する限り、JMC のリスザルも多くの時間を樹上で生活している。一方で JMC のリスザルは給餌が地上で行われるため、地上の餌をわざわざ樹上に運んで採食している。そこで、樹上で採食を行えるようなエンリッチメントはないかと考え、図のようなエンリッチメントを考案した(図)。ロープによって木の枝に引っ掛けたバスケットを上げ下げするだけならコストも手間もかからないだろう。また、木の穴に餌を詰めることについても同様だ。次回 JMC に行くとき、改めて担当して下さった飼育員の方に有用かどうか尋ねてみたい。</p> <p>二日目および三日目では、獣医さんによる縫合、避妊は獣医さんの仕事であった。同じ獣医でも二日目と三日目では別の獣医さんに作業を見せていただき、動物園の運営にはさまざまな面での専門家が必要なのだと感じた。また、死んだ個体のすべての遺体について解剖を行い、死亡要因の推定および標本としての保存を行っている</p>

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

教わった。これらの標本は、脳科学や形態学分野で貴重な資源になっているのだと思う。私達もホルマリン漬けにし、標本作製する行程を体験した。これらは劇物を扱うものの、複雑な作業ではなかった。このようなことは国内のほとんどの動物園では行われていないだろう。一方で、国内で霊長類に限らない標本を確保することは意義があることだと考えられる。今後、JMC 以外の動物園でもこのようなことが積極的に行われたら良いと思う。

この実習を通じ、キュレーターとは同じ動物園・博物館に何人かいればよいものではなく、様々な分野の研究者が同所的にいるとより良いものだと感じた。しかし逆に言えば、動物園のキュレーターが多くのことを学ぶのではなく、様々な分野の研究者が少しずつ動物園に貢献し、研究活動と並行しながらキュレーターを兼任することで動物園は良くなるのだと思う。現在日本のほとんどの動物園ではキュレーターは一人もいないが、まずは研究活動に負担にならないようにキュレーターを兼任する研究者を増やしていくことが、日本の動物園のキュレーターを増やしていくことにつながるのだと思う。



エンリッチメント案のディスカッション



骨格標本実習の様子



(図) 私たちのリスザルのエンリッチメント

### 6. その他 (特記事項など)

本実習は、PWS リーディング大学院プログラムの支援を受けて遂行できました。PWS プログラムおよび日本モンキーセンタースタッフの皆様にご感謝申し上げます。